

34

2018・November

●Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学

●コーパスを用いた日本語と中国語の対照研究
他言語との比較や、無意識の意識化により
日本語の特徴を解明する—— 5
文学部 総合文化学科 建石 始 教授

呼ばれるところに抗うことなく応えたい—— 9
—— 青年養成の使命を胸に ——
カトリック福岡司教区 本部事務局職員 平尾 千衣子 さん

楽しみながら生きた英語を
E-Zone(English Zone)—— 11

●オープンキャンパスで特別なツアーを実施
学生が語る神戸女学院—— 12

●公認心理師養成に対応した
新カリキュラムが始動
公認心理師と臨床心理士
ダブルライセンス取得を視野に—— 13

●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科が
高校生対象に体験プログラムを開催
科学で未来を切り拓こう「サイエンス体験」—— 14

●神戸女学院大学・新制大学設置認可 70 周年
さらなる飛躍を目指して—— 15
あらゆる可能性を拓くりベラルアーツ教育を軸に

●変わる大学教育、重要性増す図書館
利用を増やす工夫いろいろ—— 16
資料を正しく利用し、知識を深める学びを図書館で

●駐大阪・神戸米国総領事による
女性とキャリア講演会を開催
「自分を信じて実りある人生を」—— 17

プロダンサーとして世界に羽ばたく—— 18
—— 好きと感謝を心の軸にして ——

KC インフォメーション—— 19

●音楽による国際連携
国境を越え、
共にひとつの物語を作り上げる
—— 神戸女学院大学 & サムヒューストン州立大学 合同オペラ公演 ——



KC & SHSU

● 音楽による国際連携 ●



インタビュー

● 音楽学部 音楽学科専任講師
松浦 修 — MATSUURA Osamu



Matsuura-Osamu

音楽を通じ、真の国際交流を実現

— 改めて、合同オペラの制作、上演までの経緯をお聞かせください。
女学院の協定校であるSHSUは、テキサス州ハンツビルに位置する学生数約1万8000人の大規模な州立大学です。芸術、音楽、演劇を学ぶコースが充実しており、学内に大きなコンサートホールも備えています。今回の合同オペラ公演は、昨年5月にSHSUからご提案いただきました。すぐに希望者を募り、オーディション

ンをして、女学院からは声楽6人、ヴァイオリン1人、ダンサー2人の計9人の参加が決まりました。参加したいのに別の公演等と重なってしまった学生もいて、それは残念でした。渡航に関するスケジュールは私の方で練り、オペラに関する細かい内容はSHSUの先生方とメールや電話で相談して決めました。そして、まずこちらの学生が3月に渡来してSHSUの学生と1週間の合同練習を重ね、3公演。その後、SHSUの学生が5月に来日し、1週間後に2公演を迎えるという流れでした。

— 合同オペラ公演の意義や目的は？
一番の目的は、国際理解です。文化や価値観が異なる学生達がいかにコミュニケーションをとり、まとまるか。オペラは歌い手やダンサー、オーケストラによる演奏も加わる総合舞台芸術。様々な人が力を合わせ、一つの作品を作り上げていくのが醍醐味であり、学生はその過程でお互いを理解し、多様性を受け入れていく。私はこれこそが「真の国際理解」だと思っています。
また、照明と舞台セットを持ち込み、生の演奏で本格的なオペラの舞台に立つ経験は、学生にとってなかなか得難いもの。アーティストにとって、貴重な経験となります。

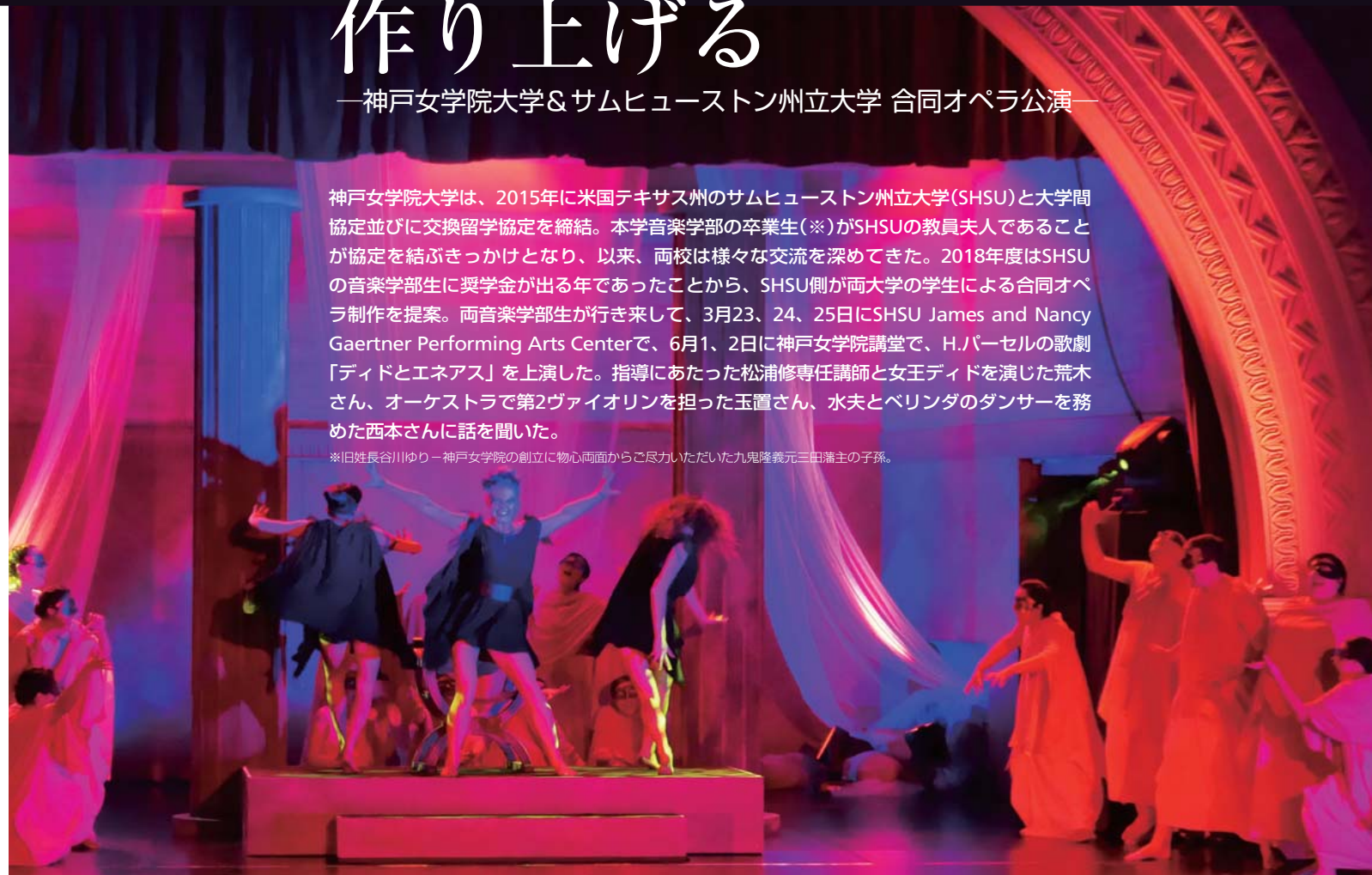
さらに、制作にあたり、両校の先生同士も密なコミュニケーションを取ってきました。大学同士の絆が深まり、

国境を越え、共にひとつの物語を作り上げる

— 神戸女学院大学&サムヒューストン州立大学 合同オペラ公演 —

神戸女学院大学は、2015年に米国テキサス州のサムヒューストン州立大学(SHSU)と大学間協定並びに交換留学協定を締結。本学音楽学部の卒業生(※)がSHSUの教員夫人であることが協定を結びきっかけとなり、以来、両校は様々な交流を深めてきた。2018年度はSHSUの音楽学部生に奨学金が出る年であったことから、SHSU側が両大学の学生による合同オペラ制作を提案。両音楽学部生が行き来して、3月23、24、25日にSHSU James and Nancy Gaertner Performing Arts Centerで、6月1、2日に神戸女学院講堂で、H.パーセルの歌劇「ディドとエネアス」を上演した。指導にあたった松浦修専任講師と女王ディドを演じた荒木さん、オーケストラで第2ヴァイオリンを担った玉置さん、水夫とペリンダのダンサーを務めた西本さんに話を聞いた。

※旧姓長谷川ゆりー神戸女学院の創立に物心両面からご尽力いただいた九鬼隆義元三田藩主の子孫。



次なる企画へ発展させるよい機会を得ることが出来たと思います。

— 国内外初の試みとなった合同オペラ制作。準備等、大変だったのでは？
オペラそのものに関する内容は、指揮者、演出家、振付家をSHSUの先生方が担ってくださったので、私は女学院生の事前指導を行いました。ただ、オーガナイズに関しては、それはもう大変(笑)。元々、オペラは調整する範囲が非常に広いのです。例えば、舞台セットの手配。大きな柱や玉座はアメリカから持ってきて来れないため、同様のものを日本で用意しました。また、舞台のせり出しを構築したり、照明機材を手配したり。それらに加え、女学院生の渡米引率やSHSU生の受け入れもありましたからね。SHSUからは学生37人に加え、教職員も多く来日されたので、学内の様々なセクションの方に相談し、多大な協力を得て準備を進めました。
予算の面では、大学から温かいご理解をいただき制作費のご支援をいただきました。また、神戸女学院大学音楽学部同窓会の「クラブファンタジー」様と米国イリノイ州を本拠地とする女学院の支援団体「KCC・J・E」様から、学生の渡航費補助の助成金を寄附いただきました。今回の公演の成功は、学内の多くの教職員の皆様と学外の関係者の皆様からのサポートがあったからこそ。心より感謝しています。

公演の手応えは？

やはり、重要文化財でもある女学院の講堂で上演できたことは大きかったですね。歌劇「ディドとエネアス」は古い時代のバロックオペラ。あの美しい空間にセットを組み、照明を入れ、演目にマッチした素晴らしい雰囲気を作り上げて、学生達が全身全霊で最高のパフォーマンスを発揮できた。それは観る者の琴線に触れ、心を動かしたはずです。完成度の高い特別な舞台を、学生はもちろん、教職員や関係者、地域住民の多くの方に観ていただけたこと、そして、素晴らしい反響をいただけたことは、この上ない成果です。
また、新聞やラジオの取材等、メディアにも数多く取り上げていただきました。大学としての新たな試み——音楽を通じた国際交流の実現を、より多くの方にお伝えできたのは喜ばしい限りです。

今後の展望は？

今回ほどの規模でなくても、演目を少しコンパクトにしたり、ピアノや管弦打楽器の学生同士の交流にしたりするなど、可能性はたくさんあります。海外の学生との芸術を通じた国際交流を、どの学生も在学中に一度は経験できるようにしたいですね。今回の挑戦により、大学間の絆は確実に深まりました。大切なのは続けていくことであり、続いていくと信じています。

■ 松浦 修(まつうら・おさむ)

神戸女学院大学音楽学部音楽学科専任講師。広島大学教育学部音楽教育学専修卒業。東京藝術大学音楽学部大学院、アメリカ・ボールドステイト大学大学院、英国王立音楽院の指揮科を修了。2005年の帰国以降、広島交響楽団、東京ニューシティ管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢など、国内の主要オーケストラへ客演。また、関西二期会の公演にも数多く関わる等、オペラの分野でも活躍。演奏活動に加え、東京藝術大学附属音楽高校非常勤講師(2009-11年)の他、国内の様々なジュニアオーケストラで子ども達の音楽教育活動に取り組んでいる。2016年より神戸女学院大学専任講師に就任。



——今回の経験から得たことは？
荒木 オーラの出し方(笑)。日本でも歩き方や立ち居振る舞いを常に意識するよ

る。先生の意見に反論したり、「こっちの方がいいと思う」と別の案を出したりする。先生もそれを「やってみよう」と言われるので面白かったです。
荒木 感じたことをまず表現し、それが相応しくなければ変えた方がいいと指摘してもらえ。先生から指示されるのではなく、自分達で決めていく。疑問に思えばディスカッションも出来るし、皆で作っていく感覚は楽しかったです。
松浦 好きにやっついていいという土壌が日本は薄いので、最初は戸惑っていましたね。でも、どんどん変化していき、特に日本公演では「こうしたい」という意思が強く伝わってきました。海外では先生も学生も同じ人間として、共に作っていく。自分達でクリエイトする経験は、アーティストにとって大事なことです。

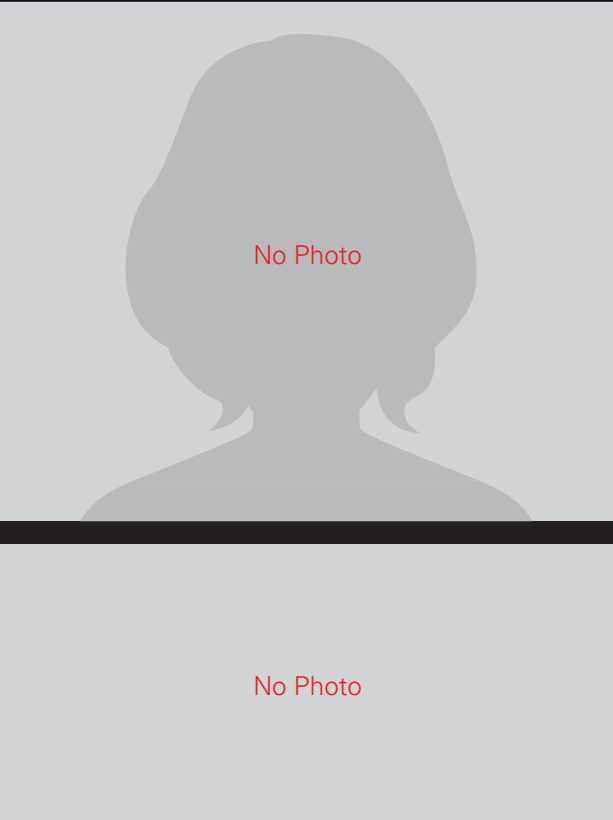
と舞台に感動して泣いていました(笑)。
西本 私も日本公演の最終シーンで自

う言われていましたが、だんだん女王の考え方が分かってきて、歩くだけのシーンでもオーラを出せるようになってきました。また、最初は役に感情移入しすぎていたけれど、死ぬ前に絶望しながら歌うシーンで「ここで本当に絶望していたら歌えない」と、自分をしっかり持つことの大切さに気付きました。お客様にキャラクターや物語を伝える上でどこか冷静さは必要であり、メンタルをコントロールし、一番効果的に見える動きを考えながら演じられるようになりました。
玉置 皆で一つの作品を作ることの楽しさを学びました。普段、室内楽の授業では楽器だけなので、試行錯誤している演者さん達を演奏で支えるのも、新しい経験でした。私は二人と違って演じてはいないのですが、毎公演、ラストになると「みんな頑張ったなあ」と



Dido&Aeneas

Opera by Kobe College + Sam Houston State University



然と涙が出てきました。それぞれいろんな思いがありますよね。今回の経験では、演技力と表現力が身につきました。これまでは、動きを揃え、細かいディテールを丁寧に踊ることを目的にしましたが、海外ではもっと積極的に自分を出さなくてはならないことを学びました。周囲からも「変わったね」と言われます。

——今後の目標は？

玉置 今回、歌や踊りに触れ、文化の違い海外の友達が増えました。様々な世界や感じ方があったと知り、「自分一人で考えて完結するなんて勿体ない」と思うようになりました。音楽に限らずもっと世界を見て、今のうちに様々なジャンルのことを吸収したいと思います。広く多くのことを学べる機会は今は少ないですから。

西本 これまでずっと舞踊だけをやってきたけれど、オペラを経験したこと

で歌や楽器にも興味が出てきました。舞踊の向上はもちろん、ミュージカルもやってみたいと思うようになったので、これからは幅広い分野に挑戦し、可能性を追求していきたいです。
荒木 私は燃え尽き症候群(笑)。今回の公演で本当にたくさん……海外の知らない方からも、お花を貰ったり声をかけていただいたりしました。オペラの世界はもっともっと深く、プロの舞台とは違うことは分かっているけれど、達成感が大きくなり過ぎました。なので、今は逆に演技から少し離れ、歌だけに集中してみようと思っています。他のバロック作曲者の曲や歌曲、言葉そのものの意味にも興味が出てきたので、一つ一つを深めたいし勉強したいです。
松浦 いくら言葉で大事だと言っても理解できない感覚を、学生が今回の経験を通して身に付けたことが嬉しいです。皆が表現者なので、それぞれの分野で自分を出し、高めていってください。

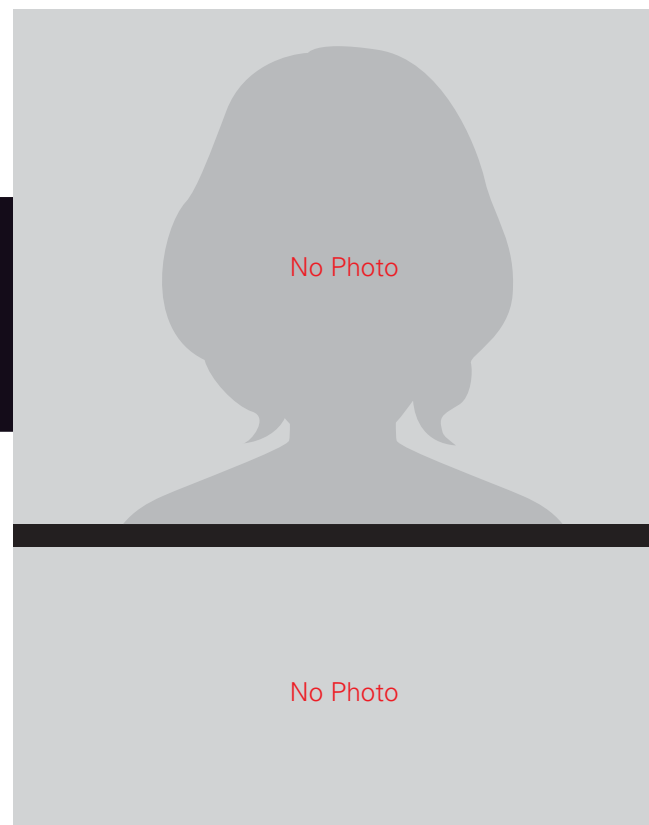


入っていきやすかったでしょう。女学院は外国語の授業が充実しているので、現地でも語学力、特に聞く力をメキメキと身に付けていくのを感じました。
——特に大変だったことは？
荒木 やはり表現です。日本人は「バロックだし」とか「発音をきちんとしないと」とか、先に頭で考えてしまいますが、向こうの人は「感じたままにやろうよ！」と、型に捕らわれない。そう言われて、「私もやっちゃえ」と思えました。
玉置 私は現代では殆ど触る機会のないバロックボウという弓を使ったので、慣れるのに苦労しました。普段使っている弓とは、重さも持つ位置も違うんです。弾き方も、いつもは響きを増大させる時に左手の指でビブラートをかけますが、バロックでは右手の弓で操る。いかに左手のビブラートを抑え、弓で響きを豊かにするかが特に大変でした。

た。あと、指揮がハーブスコードの弾き振りだったので、それを見ながら息を合わせ、音を締めるのも難しかったです。
松浦 バロック音楽は指揮者がいない時代のもの。現代とは楽器も演奏形態も違います。指揮者なしで8人のアンサンブルの呼吸を揃えるのは難しかったです。
 また、今回は役ごとにダンサーが付くモダンな演出。歌手がストリーを歌い、その内容をダンサーが踊りで表現しました。西本さんはアメリカでは水夫、日本ではペリンダの二役を踊りましたが、飲み込みが早くて驚きました。
西本 普段から授業で鍛えられているから(笑)。でも、一度に二役の振り付けを覚えなくては行けなくて、本当に大変でした。私の専門はコンテンツポラリダンスなので、オペラの歌に合わせて踊るのは初めての経験。役になりきって踊ったことがなく、ストーリーや役の悲しさや切なさといった感情を身体で表現するのは難しかったです。
——日本とのギャップを感じた点は？
西本 日本だと先生の指示通りにするけれど、向こうでは先生と学生が一緒になって意見をばんばん出しちゃります。「それいいね！」となると、採用もされる。だから、自分なりにやってみて皆が「Good! Good!」と言ってくれた時は、すごく嬉しかったです。
玉置 演奏もそうでした。おかしいと思ったら、先生でなくても誰かが止め



- 大学院 音楽研究科 2年生
荒木 さん—— *K.ARAKI*
- 音楽学部 音楽学科 器楽専攻ヴァイオリン 2年生
玉置 さん—— *H.TAMAOKI*
- 音楽学部 音楽学科 舞踊専攻 2年生
西本 さん—— *N.NISHIMOTO*





◎コーパスを用いた日本語と中国語の対照研究

他言語との比較や、 無意識の意識化により 日本語の特徴を解明する

●文学部 総合文化学科
建石 始 教授——TATEISHI Hajime

日本語を母語とする人は、特別な訓練や学習をしなくても気づけば話せるようになっており、苦勞することなく日本語を習得できる。しかし、日本語を母語としない人にとっては、習得が困難なことも多い。日本語も外国語の一つとして捉え、他言語との比較などから語彙や文法形式の特徴を導き出している建石始先生に話を聞いた。



をお聞かせください。

以前の研究は、研究者が自分自身の内省に基づいて分析するというのが主流でした。また、分析に必要な例文を収集するためにはひたすら小説を読み、テーマに関する文を見つけたら付箋を貼ってデータ化するという作業を繰り返さなくてはならず、とても時間がかかりました。今は研究用の大規模なコーパスが整いつつあるので、瞬時にデータを集め、より客観的な分析をすることが可能となりました。

私は現在、コロケーション、つまり、ある表現が他の表現と共起することに注目し、コーパスを用いて、意味的に対応する日本語と中国語の語彙や文法形式を研究することに興味を持っています。例えば、日本語の名詞「発生」に結びつくのは「事故」や「災害」といった名詞が多く、悪い意味やマイナスイメージに偏っています。しかし、対応する中国語の名詞「発生」は「現象」や「行為」といった名詞にも結びつき、日本語ほど悪い意味やマイナスイメージには偏らないことがわかりました。こういったことは、二つの言語データを比較することによって初めてわかることです。また、これまでにコロケーションを扱った対照研究は行われていないため、データとしても貴重です。

——その他に、どのような研究をされているのですか？
他にも、コーパスを使って「～ばか

■無意識を意識化する

——ご専門の日本語学とは？

学生には「無意識を意識化する」ことが大切だと説明しています。例えば、「書く」の過去形は「書いた」、「読む」の過去形は「読んだ」です。では、どんな動詞の過去形が「～た」になり、どんな動詞の過去形が「～だ」になるのかを質問しても、ほとんどの人は答えられません。一方、「書く」の英語「write」、「読む」の英語「read」はある条件下で「writes」や「reads」になります。では、どんな時に「～s」が付くかを質問すると、ほとんどの人が答えられます。英語は学習して身につけたので知っていますが、日本語は無意識に使っているから説明できません。無意識のうちに身につけた日本語にもルールがあると気づくことが日本語

を研究する第一歩となり、そのルールを説明することが私の役割となります。

日本語学の研究というと、学生は日本語の語源や方言、敬語、若者言葉といったことをイメージしがちですが、そのようなテーマばかりではありません。授業では言語資料をデータベース化したコーパスを使いながら、さまざまな研究テーマがあることを伝えています。

——先生がこの分野に興味を持ったきっかけは？

実は私、高校時代は理系だったので、通っていた塾に英語を教えるのがとても上手な先生がいて「文法は面白い！」と思うようになり、文系に転向しました。要するに、文法オタクなんです(笑)。その後、大阪外国語大学へ進み、中国語を専攻しましたが、中国語は語感が働かず、ある文を作ってもそれが正しいかどうかが全くわかりま

せんでした。それなら自分自身の語感が働く日本語を分析してみようと、大学院から日本語学の研究に携わっています。

■比較により見えてくる言語の特徴

——中国語を分析することで、日本語のこともわかるようになるのですか？
中国語のデータだけ、あるいは日本語のデータだけを分析してもわからず、二つの言語データを比較することによって初めてわかることがあります。日本語と中国語で共通していることは他言語にも当てはまる可能性があり、一方の言語のみに見られることはその言語独自の特徴である可能性が高いということです。

——それが現在、取り組まれている日本語と中国語の対照研究ですね。内容

日本語



■日本語は同音異義語が豊富だと言われている。「さす」や「かく」にはその他にもさまざまな同音異義語が存在する。

りだ」と「ところだ」の違いなど、日本語における類義表現の違いを調査し、これに対応する中国語の表現の使用実態なども分析しています。対照研究はさまざまなテーマで行うことができるので、面白いと感じています。

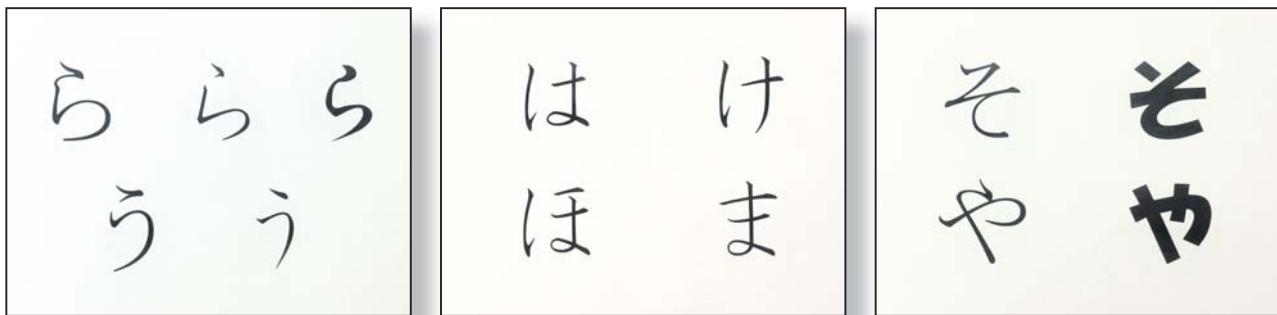
また、対照研究のメリットは、言語研究のみにとどまらず、教育の分野にも貢献できるということです。日本語、または中国語の特徴を導き出すことによって、学習者の誤用や、その言語の母語話者が普段使わないような表現を防ぐことができます。また、教師がより自然な例文を作る際にも役立ちます。

近年、日本語学や日本語教育学を専攻する日本人の大学院生は減っており、留学生、特に中国語を母語とする留学生が増えています。コーパスには書き言葉や話し言葉、会話、作文など、さまざまな種類があるため、その中のどれを使ったらどのような分析ができるかなど、実例を挙げて活用方法を提示したいと考えています。それによって、



■絵カードを使った言語教育
ある単語を初めて導入する場合、どのようにすれば学習者にその単語の意味を伝えることができるだろうか。日本語教育の現場では、このような絵カードが使われることがある。それによって、学習者は絵を見ながら、単語の意味を理解することができるようになる。
(左から「教えます」「起きます」「読みます」「帰ります」「行きます」)

▼日本語の文字の形の類似性は、わかりづらい



その対策として、実際の教育現場では授業外で指導を行う「取り出し授業」や、授業中に日本語指導教師などが入ってサポートする「入り込み授業」が行われています。今回の分析はケーススタディー的な研究なので、さらにデータを積み重ね、将来的には実際の教育現場で役立つようにしたいですね。

——今後の展望をお聞かせください。

これまで述べてきたように、外国籍の子どもが増えている現状に対し、日本語教育の分野から社会貢献することを考えています。着任以来ずっと日本語教員養成課程を担当しているので、その受講生や卒業生たちとうまく連携を取りながら、地域や教育現場に貢献できれば理想的です。

それとは別に、日本語学、特に日本語文法に関する研究をさらに進めていきたいと思っています。これまでにコーパスを使って、前述の「発生」や「くたばかりだ」「非常に」などを分析しましたが、他の項目も分析し、成果として残したいです。コーパスの種類はこれからも増えていくと思うので、複数のコーパスを比較したうえで言語の特徴を明らかにし、より研究を深めることができると 생각합니다。また、コーパスだけでなく、日本語の分析に役立つさまざまなツールも開発されているので、それらを使って研究を進めていきたいですし、逆に私の研究がそのようなツールの開発に反映されることがあればとてもうれしいです。

日本人の大学院生だけでなく、留学生にも研究しやすいテーマや切り口を提供し、研究の後押しができるのではないかと考えています。

■日本語を第二言語とする子どもたちのつまずき

——県立広島大学の中石ゆうこ先生との共同研究「外国につながる子どもたちのための語彙シラバス」とは？

近年の国際化に伴い、国籍を問わず日本語を第二言語として育つ子どもが増えており、教育現場ではしばしば「日常会話は問題ないのに、授業についてこれない」という現象が起こっています。そこで、中国にルーツをもつ児童が複数いる小学校の授業記録を材料に、そのような児童がどのような語につまずくのかを分析しました。

——どのようなことがわかりましたか？

日本語を第二言語とする子どもにとつて、どんな語が難しいのかが明らかになってきました。例えば、「かける」「割る」「等しい」「あらずじ」「繰り上がり」といった教科に特有の抽象的な概念の語や、「借りる」「いはる」「空港」「銀行」といった日常生活の語も難しいことがわかりました。教科に特有の抽象的な概念の語は、日本語を母語とする人はなかなか気づきませんが、日本語を第二言語とする子どもにとっては、専門用語のように使用されているのでとても難しいのです。



平尾さんは『福岡教区報』の取材から編集デザイン、校閲まで幅広く手掛けている



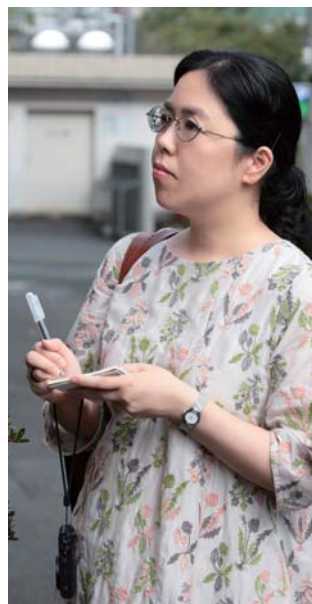
訪問メンバーと慈恵病院の方たちを囲んで記念撮影



「こうのとりのゆりかご」内側の様子



取材に訪れた慈恵病院は日本で唯一「こうのとりのゆりかご」を開設している



呼ばれるところに 抗うことなく応えたい

——青年養成の使命を胸に——

●カトリック福岡司教区 本部事務局職員
平尾 千衣子 さん——HIRAO Chiaki

「私の人生は“引き渡されていく人生”なんです。自ら切り拓き、掴みとっていく人生もある。けれど、呼ばれるところに抗うことなく自分を差し出し、応えていきたい——。フランスで1年、フィリピンで5年、カトリック系団体の青年養成に携わり、現在はカトリック福岡司教区の本部事務局で広報や翻訳、被災地の復興支援等の仕事をしている平尾千衣子さん。様々な人に出会い、導かれ、国や県を越え、地域社会に目を向けた活動を進めている。



「信仰は大切にしてきたけれど、むしろ一般社会で生きたいと思っていた。4歳で洗礼を受けた平尾さん。今はカトリック福岡司教区の中心部で働いているが、教会の仕事に就くことは考えてもいなかったという。きっかけは、2006年に香港で開催されたアジアのカトリック青年大会。平尾さんは日本代表として大会後の会議に参加し、世界各国で青年養成プログラムを提供しているメンバーと知り合った。「フランスのプログラムは日本とは違う。何かがあると感じ、それを確かめるためにフランス留学を決意。中途半端な時期にも関わらず、職場も「貴女には別の使命があるのかも」と快く送り出してくれた。「自分だけで判断し難い時、不思議といつも人生の先輩方が

●信仰と社会のはさまで

意外な発想を与えてくれたり、背中を押してくれたりするのです」。

●**ありのままの自分で出来ることを**

平尾さんはそれまで、いつもどこかで「クリスチャンだからいい子でいなければ」と思っていた。フランスで受けた青年リーダー養成プログラムは、「自分はそのまま大切にされている。そのままの自分で社会に貢献できる」と、実感できるものであり、救われる体験になったという。「カトリック教会で神父やシスターと呼ばれる聖職者は1%程であり、99%は信徒。教会のことに関しては聖職者が主役で、信徒は端役という認識が伝統的にあります。教会内のバランスをよくし活性化するために、信徒の育成が急務ですが、そのために一般信徒が若年層の育成にあたることも海外では珍しくありません。養成者という生き方があり、それが私の使命ではないかと思いました」。

その後、平尾さんは養成者となりフィリピンへ。布教や伝道、教会内部へ向けた活動ではなく、よりよい地域社会を作るために奉仕できる青年リーダーを育てることに尽力した。



フィリピンの養成セミナーで仲間たちと

●人との繋がりに導かれて

「いつも使命に呼ばれ、運ばれている気がします」。ミッションのためならばと1年のつもりで行ったフィリピン滞在は、気付けば5年に。それでもまだやることがあると感じていた矢先、日本への帰国を余儀なくされた。不意な帰国だった。帰国後、道を模索していた時に福岡教区から、広報の職員として来てくれないかと声がかかった。振り返ると、福岡教区には縁があった。フランスで親しくなった青年がいることもあり、福岡の青年達とは帰国の度に会っていた。フィリピンからスカイプを通じて聖書の勉強会も開催するなど、常に交流しており、その繋がりにから司教とも面識があった。「日本で養成者はまだまだ認知されていない。けれど、広報の仕事をしなくても活動はできる——」。不安もあったが、呼びかけに応えることに決めた。

●様々な出会いを糧にして

現在、平尾さんは教会の機関紙『福岡教区報』の制作を担当し、教区や信徒の活動内容をはじめ、信徒の信仰生活の糧となる記事を紹介している。この仕事の醍醐味は、「何と言っても人との出会いがあること。取材に行くとき必ず素敵な方がいて、その方達に人として育ててもらっています」。聞けば、これから慈恵病院へ行き、青年達による「こうのとりのゆりかご」の訪問を引率

し取材するという。以前、平尾さんが広報の仕事で当院に携わったことと、話を聞きたい青年の思いがうまく重なり、様々な人との繋がりを経て実現した訪問だ。「私の活動を介してご縁が繋がっていくと、役に立てたのかなと嬉しくなります」。

●リベラルアーツ教育から得た力

海外生活や未経験の広報職にも柔軟に対応していく平尾さん。大学時代の学びについて尋ねると、「多くの人と繋がりたい、これを成し遂げたいと思う時、やはり英語が役に立っています。神戸女学院の英語教育は、英語を学ぶことが目的ではなく、英語を使って何をするのかを問われるものでした。ひたすら英米文学作品を読む等、当時はその意図がよく分からずにいました。ですがそこには教養の豊かさがあったのだと、今ならその価値が分かります」。また、ミッションを大切にしている教授や職員の方々が周りにいて、その信念やしなやかな生き様を見せてもらえたこと、素晴らしい建物を当然のように使い、真理に繋がる美に触れたことも大きかったという。「私がどこにでもわりと適応できるのは、女学院の人

●排除はせず、新しい風を吹き込む

目下、平尾さんが進めているのは、福岡教区ウェブサイトのリニューアル。「内部ではなく、一般の方に向けたサイトにしたのです。教示的な内容とは違って、教会に纏わる真によいものを伝えられたら」。例えば、今年7月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」。世界遺産として教会に興味を持った人が検索した際、併せて現代の教会の価値にも触れてもらえるようにと考えている。「教会は社会の縮図。子どもからお年寄りまで属しており、様々な職業や考え方の人がいます。私のように外から来た者がやると言ってもすぐには難しいもの。ここでの生活も4年目に入り、ようやく人間関係の構築が出来てきました。皆さんの力を借りながら、誰の意見も排除することなく形にしていきたいですね」。

■平尾千衣子（ひらお・ちえこ）

2000年文学部 英文学科卒業。同年 東京大学大学院 人文社会系研究科英語英米文学専攻 修士課程に入学し、03年に修了。04年より神戸女学院大学 学長室で派遣社員として働きながら、私立愛徳学園小学校 英語非常勤講師を務める。07年に渡仏し、カトリック系団体Fondacioが運営する研修プログラムに参加。アンジェカトリック大学 神学部科目を履修。09年よりフィリピン・マニラでFondacio Asiaが運営する青年リーダー養成センターの養成者として勤務。14年に帰国し、現職。



熊本市中央区のカトリック手取教会にて

Open Campus Tour

学生が語る神戸女学院

●オープンキャンパスで特別なツアーを実施

オープンキャンパスに来場した受験生や保護者に、学生スタッフがキャンパスと学びを紹介する二つの特別なツアーを開催した。英文学科の学生が中心となり英語から日本語、日本語から英語の通訳で施設を案内する「英語でミニツアー」と、環境・バイオサイエンス学科の学生がキャンパス内の自然について説明する「KCネイチャーツアー」だ。神戸女学院の魅力を知り尽くした学生が日頃の学習の成果を発揮し、高校生に楽しんでもらうこのツアー。企画に関わった二人の学生に話を聞いた。

No Photo

■恵まれた環境から学べる楽しさを伝えたい

私自身、高校生の頃にオープンキャンパスに参加し、岡田山の豊かな自然に惹かれた1人です。環境を生かして生物や生態系について学べるのは環境・バイオサイエンス学科の魅力。学生スタッフの活動では、その素晴らしさを伝えること



KCネイチャーツアー

●人間科学部
環境・バイオサイエンス学科4年生
中野 さん

ができるので、やりがいを感じています。2017年3月にネイチャーツアーのプロジェクトチームが発足し、私は副リーダーとして活動。自然観察入門の授業のような形で「女学院の自然観察に特化してミニツアーを行う」という企画案の下、本学科の有志で準備を進め、昨年6月のオープンキャンパスで初公開となりました。



チームの皆で、どんな植物を取り上げればよいか議論を重ね、学科の先生にもご指導いただき、季節ごとにキャンパスを彩る花や木を紹介する説明文と写真を用意。専門用語をかみ砕いた説明、キャンパスライフのエピソードなどを盛り込みました。

恒例の「英語でミニツアー」は、英文学科の学生を中心に行っています。目的は、本学で身に付けた英語力を来場者の方に披露し、さらに通訳・翻訳プログラムの魅力を伝えることです。30分間で図書館本館と講堂、MM教室を周り、建物の特徴や歴史、語学の授業などを紹介しています。



英語でミニツアー

●文学部英文学科3年生
藤原 さん



従来の資料は説明が細かく文章量が多かったため、もっとコンパクトで明瞭にし、どの学科の学生でもガイドができるように、2017年10月から当時4年生だった先輩と2人で作り直しました。12月のオープンキャンパスでの使用を目指し、新バージョンを11月前半にネイティブの先生方に添削して

いただき、完成版を使って実際に時間内に回れるかどうか練習しました。心を砕いたのは高校生にわかりやすい表現です。難しい単語の使用は極力控え、指差しやジェスチャーを交えてゆとり説明するなど、言い回しを工夫しました。

参加する高校生には、私たちが英語でキャンパスを紹介する姿を見て、女学院生になりたいと思ってもらえたら嬉しいですね。それが本学の授業や学習環境の魅力の理解につながり、本学への志望、学びへの後押しとなればと思います。

これからもオープンキャンパスを通して、高校生たちの憧れの存在となれるように頑張りたいです。

English Zone

楽しみながら生きた英語をE-Zone

英文学科には、英語のみで会話をする部屋「イングリッシュ・ゾーン(Eゾーン)」が設けられている。学科を問わず誰でも利用できるこの部屋には、昼休みを中心に日本人学生と留学生のスタッフがシフトで常駐し、ゲストに対応。ゲストは英語力を駆使しながら、ネイティブスピーカーとの交流を楽しむことができる。Eゾーンのメリットなどについて二人の日本人学生スタッフに聞いた。



Eゾーンは元英文学科のDoherty先生が発案。ネイティブスピーカーと朝食や飲み物をともにしながら自由に話せる場として、1999年にオープンした。原則として日本語の使用は禁止で、2018年度前期は日本人3人、留学生4人のスタッフがお昼休憩(金曜日を除く)と空き時間に活動。提携校からやってきた留学生の歓迎会や、クリスマス、ハロウィンなどの季節の行事を企画し、随時開催している。

留学生と話す機会は自分で作らなくては、巡り会えない。ここに訪れるゲストは様々な留学生と友達になりたいう学生や、留学が決定し、渡航する前に自分の英語力を試したい学生、英語関連科目の受講についてアドバイスを求める1年生。学部・学科や学年が違えば、英語力のレベルにも差はあるが、一人ひとりが思い思いにネイティブス



●文学部英文学科3年生
杉田 さん



●文学部英文学科3年生
江島 さん

ピーカーとの会話を楽しむ。英語版の人生ゲームなど遊びながら学べるツールもそろっていて、多い日は14、15人の学生が集うという。

英語力の向上にこの貴重な空間を生かそうと、教授たちもEゾーンへの参加を奨励している。江島さん、杉田さんの二人は、2年次の前期からスタッフとして活動。英文学科のCareer准教授が主宰する図書館での絵本の読み聞かせ活動を手伝っていたことから、Eゾーンのスタッフに推薦された。

「私たちの役割は、英語の苦手な人も第一歩を踏み出せるようサポートすること。留学生の話を簡単な単語に言い換えて伝えてあげたり、なかなか単語が出てこない人に対しては、『こういうことを言いたいんですね?』と問いかけて相手の言いたいことを引き出します」(江島さん)。これらをすべて英語でやり取りしているという。逆に留学生に対しては、日本語での言い換え方をアドバイス。留学生にとっても日本語を学ぶためにEゾーンは欠かせない場となっており、日本人学生に手伝ってもらいながら日本語の授業の課題をこなす姿も頻繁に見られる。

「授業で学ぶ英語と実際に話す英語には違いがあります。Eゾーンで身につくのは若者言葉など、教科書には出て



▲Eゾーンに揃った様々なボードゲーム

こないカジュアルな英語。ネイティブの子たちから生きた英語を学べるメリットは大きいです」(杉田さん)。留学前の学生もEゾーンで対話に慣れれば、自信を持って異国の環境に飛び込めるのではないかと話す。実際に、最初は単語の羅列程度の英語力だった学生が日常会話を話せるまでになり、提携校への留学が決まった例もあるという。



●留学生・Eゾーンスタッフ
Marbella さん



今後の課題は、ゲストが多い時でもしっかり対応できるよう、スタッフの力量を上げていくことと、パーティ以外にも気軽に交流できる機会を増やしていくこと。スタッフのフィリピン人留学生Marbellaさんも「毎日、専攻や学年の違う日本人学生の皆さんと出会えるのが楽しみです。授業をきっかけに來られた方も、この機会を大切にしたい、殻を破って交流を楽しんでほしいと思います」と語っている。

L I C E N S E

◎公認心理師養成に対応した新カリキュラムが始動

公認心理師と臨床心理士
ダブルライセンス取得を視野に

●人間科学部 心理・行動科学科 (人間科学部長 人間科学研究科長)

小林 哲郎 教授—— KOBAYASHI Tetsuro



公認心理師とは、国民の心の健康の保持増進のために、保健医療、福祉、教育、その他の分野において、質の高い心理支援を提供することを目的として作られた心理専門職初級国家資格。厚生労働省・文部科学省共管のもと、2017年9月に法律が施行され、今年4月より、神戸女学院大学を含む多くの心理学系の学部・学科で、その養成教育が始動した。本学人間科学部心理・行動科学科では、15年9月の法案制定を見越して、ワーキンググループを作り、学科をあげて公認心理師養成カリキュラムの開設準備を進めてきた。これまで本学科にて取得可能とされる国家資格は精神保健福祉士のみだったが、公認心理師も重要な柱のひとつに加えられ、既存の臨床心理士との2資格取得も可能になった。ワーキンググループ長として新カリキュラム導入に尽力した小林哲郎教授に、その背景など話を聞いた。



——短期間での新設、さぞ大変だったのでは？

厚労省・文科省のカリキュラム検討委員会による決定が17年5月までずれ込んだため、厳しかったですね。公認心理師になるためには、原則として学部4年間と大学院2年間とで所定科目の単位を取得し、資格試験に合格しなければなりません。カリキュラムには学部で80時間、大学院で450時間以上もの実習が課せられ、その多くは医療機関を必須とする3領域以上の学外機関で実施せねばなりません。公認心理師と臨床心理士の2資格を受験可能とするには、重なる科目は多いものの、それぞれの条件を満たさねばならず、実習先と新科目の講師を探しながらの再編は苦労の連続でした。

——現学部生も資格を取れるのですか？

17年度に学部、大学院に在籍していた学生は、科目の読み替えによる特例の経過措置があります。なので、それらを取得し、大学院に進学して所定の科目を修得するか、認定された施設で数年の実務をすれば可能です。また、大学院修了生も読み替えできれば受験でき、心理的支援の仕事をしている現任者も一定の条件を満たせば受験できます。ただし、他大学の心理学部以外から本学大学院へ入った等、科目が読み替えられない学生は取得できません。

——臨床心理士との違いは？

臨床心理士は、約30年の歴史と実績

——今後の展望をお聞かせください。

目先の課題は、公認心理師試験にパスすること(笑)。私達教員も資格取得が必要なんです。また、今後の実習先の確保も検討が必要ですね。新カリキュラムは実習が多く、特に大学院生は相当ハード。学生も教員も、心身共に健康を維持できるよう注意して進めていきます。

Biosphere Sciences

◎人間科学部 環境・バイオサイエンス学科が高校生対象に体験プログラムを開催

科学で未来を切り拓こう「サイエンス体験」



人間科学部 環境・バイオサイエンス学科では毎年夏に、高校生向けに「サイエンス体験」を開催している。環境・バイオサイエンス学科への進学を検討している高校生に対し学科教員が講師となり、学科で実際に行っている実験や実習を体験してもらうことで、学科での学びを知ってもらうための企画である。

最初に「サイエンス体験」が実施されたのは、2004年。翌2005年の環境・バイオサイエンス学科の誕生に向けての学科のアピールと「リベラルアーツ&サイエンス」を掲げる女学院の宣伝も兼ねて実施されたことが始まり。ただし、それ以前にも学科の前身である人間科学科人間環境科学専攻で「研究室体験」と題して、学科の学びを紹介する企画が実施されていた。今年の「サイエンス体験」は、8月6日(月)と25日(土)に実施された(両日ともに午前・午後の二部制)。



中庭の噴水で飼育している「西宮メダカ」を確保して観察する参加者



8月6日(月)午前の部は、遠藤知二教授(動物生態学研究室)による「ミツバチのダンスを観察しよう」で、ミツバチの巣内行動を観察できる巣箱を使い、ミツバチのダンス行動を観察する実習が行われた。同日午後の部は、塩見尚史教授(応用生命科学研究室)による「微生物をもっと知ろう」をテーマに、指や土にある微生物を調べたり、納豆やテンペを作ることによって微生物について理解するための実習を実施。



学科説明会の様子

8月25日(土)午前の部は、西田昌司教授(健康医学研究室)による「働く分子「蛋白質タンパク質」」。蛋白質を測ってみよう」で、血液中の蛋白質を測定する実験を行った。測定には蛋白質定量に最もよく使われている「ビュレット法」で測定し、実際の実験方法を体験してもらった。続く午後の部では、三宅志穂教授(自然環境教育学研究室)による「Sharing Nature」で、参加者は岡田山キャンパス内のネイチャー体験を通じて自然と人とのよい関係性のあり方を考えた。

70th Anniversary

神戸女学院大学・新制大学設置認可70周年

さらなる飛躍を目指して

●あらゆる可能性を拓くりベラルアーツ教育を軸に

本年3月25日に、神戸女学院大学は戦後に新制大学として設置認可を受けてから70年を迎えた。1948年に新制大学として設置認可を受けたのは、全国で12の大学。西日本の私立大学では関西大学・関西学院大学・同志社大学・立命館大学と本学の5校、女子大では津田塾大学・東京女子大学・日本女子大学・聖心女子大学と本学の5校が認可された。本学は最初的女子大学の一校でもある。



▲昭和23年、文部省に提出された申請書

当時の文部省に提出された大学設置申請書には、「本学は基督教の教に基いて教育を施し、女子をして広く知識を究め深く専門の学芸を修めまた高く人格を磨かしむることを以て目的とする。而してこの目的の達成を期すると共に本学に学ぶものをして神戸女学院の伝統である国際精神と基督教信仰とを体得実践するものたらしめ、知的にも道徳的にも、文化社会の生成発展に寄与する人物を育成して、平和世界の確立発展に貢献することを以て使命とする。」と書かれている。

新制大学発足時には、文学部1学科に英文学科・社会学科・家政学科の3学科が設置された(音楽学科は翌年に設置)。それから70年を経た現在では、3学部5学科・大学院3研究科を置くまでに拡大している。



このことを記念して、大学広報では次の2つの取り組みを実施した。

交通広告の掲出



4月に「女は大学に行くな、」から始まる交通広告(電車内ドア横広告)をJR西日本の普通電車と阪急全線に掲出。新制大学設置認可70周年を記念したことに加え、この春に大学に入学した新入生に対するメッセージも込められた。

広告を見た方がSNS(Writer)に感想を投稿したことをきっかけに、ネットを中心に大きな反響があり、その後ネットニュースや新聞、報道番組でも取り上げられた。また、本学ホームページへのアクセス数、および本学のネットでの検索数が急増し、結果的に本学の社会的認知の向上にも貢献した。

記念誌の発行

在学生を対象に、卒業生へのインタビューをまとめた冊子を年内に発行する予定。会社経営者、英語教員、メーカーでの研究開発職、臨床心理士、演奏家、キャスター、そして映画監督など、社会の各方面で活躍する20代から60代まで20名の卒業生にインタビューを行った。これまでの人生や現在のお仕事・活動内容に加え、本学のタグライン「私はまだ、私を知らない。」に沿った形で、今後取り組んで行きたいことなど、未来についても語ってもらっている。

現在本学で学んでいる学生がこの冊子を手に取り、自分たちの先輩である卒業生がいかに幅広い分野で活躍しているか、どのような人生を歩んでいるかを知ること、自分のこれからの生き方をイメージするきっかけにしてほしい。

本学での学びを表すタグライン「私はまだ、私を知らない。」の制定に始まり、大学ホームページのリニューアル、複数回の交通広告の掲出、学生向けリーフレットの発行などブランディングのための施策を進めてきたが、新制大学設置認可70周年の記念誌の発行により一つの節目を迎える。今後も大学広報では引き続き、本学の価値を学内外に知ってもらうための取り組みを進めていきたい。

●変わる大学教育、重要性増す図書館

利用を増やす工夫いろいろ

資料を正しく利用し、知識を深める学びを図書館で



図書館本館、新館および音楽学部図書室(音楽学部2号館1階)、史料室(図書館本館1階)、視聴覚センター(文学部1号館1階)を管理・運営する図書館。館長の下、専任職員8名と派遣・アルバイトスタッフとともに、より多くの方に図書館を利用していただくことを目指し奮闘する、石村真紀課長に話を聞いた。

▲19分野の基本図書を推薦した「KC100 神戸女学院の100冊」の書棚

——最近の大学図書館は旧来のイメージから、ずいぶん変わってきましたね。

はい。アクティブ・ラーニングが取り入れられるなど、大学の授業方法も変わり、図書館もそういった授業形態にふさわしい学びができる施設へと変わってきています。当館では新たな学修の場として、2013年、ラーニング・コモンズを新館1階に開設し、「iLib(アイリブ)」と名付けました。名前の由来は、人との「出会い」・知との「出会い」の「a」と「Library」の組み合わせです。可動式テーブル、ホワイトボードを備え、ノートパソコンも貸し出し、図書やインターネットから情報を収集し、ディスカッションを行うこともできます。大学院生が論文やレポートの書き方をアドバイスするライティング・サポートも受けられます。

——学生たちは、図書館をうまく使いこなしていますか？

iLibの利用の仕方も開設当初に比べると、上手になってきました。ただ、高校までの経験の差が大きく、カウンターで手続きしてから図書を借りるこ



●図書館 石村 真紀 課長



●おすすめ本を紹介する「特集コーナー」

●可動式テーブル



▲本にまつわるエピソードや図書の紹介などを掲載した図書館発の冊子「Elle le lit」



●利用者が本のおすすめポイントを紹介する「読書deスタンラリー」



——とを知らない新入生もいるので、新入生全員に、簡単なクイズを楽しみながら、図書館に親しんでもらうガイダンスを、毎年実施しています。在学中に、図書館の資料を正しく利用し、学びを深めることを、しっかりと身に付けてほしいと思います。そのためにも、利用者を増やすのが、今いちばんの課題です。

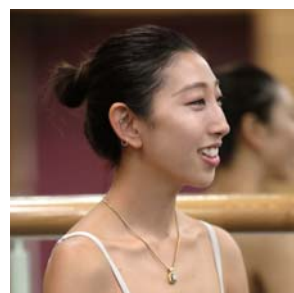
——利用促進策を実施されているのですか？

テーマに沿ったおすすめ本を紹介する特集コーナーの設置や、本とそれにまつわるエピソードを紹介するリーフレットの配布、利用者が自分の読んだ本を紹介するPOPを書き、一冊書くことにスタ

プロダンサーとして 世界に羽ばたく

—好きと感謝を心の軸にして—

世界的に有名なダンスカンパニー「ネザーランド・ダンス・シアター(NDT)」。
オランダ・ハーグを拠点とし、ヨーロッパやアメリカを中心に
コンテンポラリー、モダンのオリジナル作品のみを上演している。
今年3月、卒業生の飯田利奈子さんは、自身の資質を高めようと
ヨーロッパのカンパニーを巡り、NDTのオープンクラスを受講。
居合わせたディレクターの目にとまり、その場で異例の入団が決まった。



●ネザーランド・ダンス・シアター (NDT) ダンサー
飯田 利奈子 さん

▼踊ることは人生の一部
オランダの名門ダンスカンパニーNDTに入団し、8月からプロダンサーとしての活動をスタートさせた飯田さん。コンテンポラリーダンスの道へ進むきっかけは、高校2年の時にオープンキャンパスで観た島崎徹先生の作品『Here We Are』。ダンサーが自由に感情を表現する姿に魅了された。「その瞬間から、踊ることは人生の一部になりました」。

▼一瞬一瞬を楽しむ
「Noisim」で2年間の研修を終え、正式契約をしようとしていた2017年。飯田さんは、またも島崎先生に後押しされ、米シカゴのダンスカンパニーを受験した。世界各国から集まった応募者は約500人。飯田さんは難関を見事パスし、合格者の6人に入った。

実は飯田さん、卒業後はテーマパークのダンサーになろうと思っていた。けれど、仏ロザンヌ国際バレエコンクールで審査員を務めた経験のある島崎先生に「海外のダンスカンパニーを目指したらどうだ?」と言われ、初めて自分にそんな可能性があることを意識した。目標を海外に切り替え、実力を磨くために日本初の劇場専属ダンスカンパニー「Noisim」への入団を決めた。

しかし、ビザが取得できず、涙をのんで入団を断念。



▼環境に左右されず、努力し続ける
「ヨーロッパに行けば、言葉の壁などに直面し辞めたいと思うことがきつとある。でも、環境に振り回されず、自分の軸にある『踊りたい』という思いと、支えてくださった方達への『感謝』の気持ち忘れずに、日々努力して進んでいきたい」。世界の舞台に挑む飯田さんの、大きな決意と覚悟が伝わってきた。

自分を信じて 実りある人生を

●駐大阪・神戸米国総領事による
女性とキャリア講演会を開催

●駐大阪・神戸米国総領事 カレン・ケリー氏
Karen Kelley



▲(左から)飯院長、カレン・ケリー氏、斎藤学長

ケリー氏は、2017年8月より駐大阪・神戸米国総領事に着任。2人の成人した息子の母親であり、シングルマザーとして息子たちを育てながら、28年超の外交官としてのキャリアを確立した。講演の冒頭では、日米関係の現状や、イバンカ米大統領補佐官らの主導で2017年度に途上国の女性起業家を支援する基金が設立されたこと、安倍政権も拠出金の賛同表明をしたことなどを

5月31日めじらウングにて、駐大阪・神戸米国総領事のカレン・ケリー氏を迎え、女性とキャリアをテーマにした講演会を開催した。
“Women's Economic Empowerment in the U.S. and Japan-A Personal Perspective~”と題した講演は、中村昌弘准教授、奥村キャサリン准教授(ともに英文学科)による同時通訳で進行。ケリー氏自身の体験に基づく貴重な話の内容をレポートする。

紹介。コンサルティング会社マッキンゼーの調査結果では、完全な男女平等が達成されれば世界経済は12兆ドル成長する可能性があることなど、女性と仕事をめぐる社会の動向について報告があった。それに続き、長期にわたる外交官人生において常に仕事と家庭を両立させるための苦悩があったことを語った。アメリカも日本同様に勤務時間の固定、保育施設の不足や出産後の復職支援などが課題。息子との触れ合いの不足や、職場では男性の同僚ほど責任を果たせていないのではないかと葛藤を続けた末に、どちらも完璧にこなすことには無理があると気付いたという。そこで自身の経験により次の3つをアドバイス。
①すべてを自分一人で行うとせずサポートをお願いすること。
②仕事と子育ての両立は簡単ではないので、失敗からも学びつつ前に進もう。人生に家庭生活を優先する時期があつて良いし、またキャリアを第一に考える時期があつて良い。
③女性には自分の能力を疑う習慣があるが、自分を信じる習慣をつけること。「企業のダイバーシティが促進されると企業の利益が上がり、イノベーション、フレキシビリティも増えて評価が上がる」とクリエイティビティを備えた女性の参画の重要性を強調。さらに「神戸女学院大学の学生であることに誇りを持ち、各自が学んだことをどう



活用して、地域、日本、世界に貢献できるかを考えてほしい。何よりも自分を信じて、諦めないで」とのエールで締めくくられた。
質疑応答では、「セクハラやMe Too運動について」「モチベーションをどう上げているのか」など学生から様々な質問が相次いだ。これらに対して、「理不尽なことにはNo」と声をあげよう。ネットワークを作り、思いの共有化を図って自分は一人ではないと気付くことが大切」とアドバイス。学生たちからは「完璧を求めなくていい、自分のことを『女』であるせいでできないやつだと思わなくていい、という言葉に勇気づけられた」「女性として社会で生きていく中でどのように過ごすべきか、今から考えなくてはいけないと思う」などの感想が寄せられ、学生・教職員150人が集まった講演会は盛況のうちに幕を閉じた。



講演会・公開講座・コンサートなど

音楽学部講演会・公演

- 定期演奏会 第九
日 時：11月27日(火) 18:30開演
場 所：兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール
入場料：2,000円
- 舞踊専攻第10回卒業公演
日 時：12月13日(木) 18:30開演 / 12月14日(金) 18:30開演
12月15日(土) 13:00開演、18:00開演
場 所：神戸女学院大学 エミリー・ブラウン記念館 地下2階スタジオA
入場料：1,000円
- オペラ実習発表会
日 時：2019年2月14日(木) 開演時間未定
場 所：神戸女学院 講堂
入場料：無料
- 卒業演奏会
日 時：2019年2月25日(月)～27(水) 18:00開演予定
場 所：神戸女学院 講堂
入場料：無料
- 舞踊専攻第13回公演
日 時：2019年3月7日(木) 19:00開演予定
2019年3月8日(金) 18:00開演予定
場 所：豊中市立文化芸術センター 大ホール
入場料：2,000円
- 新人演奏会
日 時：2019年4月17日(水)
場 所：いずみホール
入場料：1,000円
- 修了披露演奏会
日 時：2019年4月25日(木)
場 所：宝塚ベガ・ホール
入場料：1,000円
問い合わせ：音楽学部事務室 TEL 0798-51-8550
FAX 0798-51-8551 E-mail: music@mail.kobe-c.ac.jp

アウトリーチ・センターイベント

- 第52回子どものためのクリスマス・コンサート
～音で楽しむおはなしの世界～「あのね、サンタの国ではね…」
日 時：12月8日(土)
第1部：13:00～14:00(12:15開場) 年齢制限なし
第2部：16:00～17:00(15:30開場) 小学生以上対象
場 所：神戸女学院 講堂
出 演：アンサンブルくれよん
田中佑奈(フルート)、樋口成香(オーボエ)、丹野桃子(ピアノ)、
和田悠加(ピアノ)
参加費用：大人500円、子ども(19歳以下)300円 申込み要
問い合わせ：音楽学部アウトリーチ・センター
TEL 0798-51-8584 FAX 0798-51-8551
E-mail: concertfch@mail.kobe-c.ac.jp

カウンセリングルームからのお知らせ

- カウンセリングルーム主催 シンポジウム
「多様な性を生きるために～マイノリティの生活設計～(仮題)」
講 師：新々江章友先生(大阪市立大学大学院創造都市研究科 准教授)
話題提供：横田恵子 総合文化学科教授
日 時：2019年3月15日(金)
場 所：エミリー・ブラウン記念館 201室(予定)
参加費用：無料・申込み要(当日参加も可能)
問い合わせ：カウンセリングルーム TEL 0798-51-8541

金曜日公開プログラム

- Boris BEKHTEREV ピアノリサイタル
日 時：11月16日(金) 10:35～11:25
場 所：神戸女学院講堂
出 演：Boris BEKHTEREV(音楽学部元教授)
- クリスマスオルガンコンサート
日 時：12月7日(金) 10:35～11:25
場 所：神戸女学院 講堂
出 演：西山聡子(学院オルガニスト)、追中宏美(学院オルガニスト)

- キャロルをうたおう♪
日 時：12月14日(金) 10:35～11:25
場 所：神戸女学院 講堂
説 教：斎藤言子(学長・音楽学部教授)



- 新年礼拝
日 時：2019年1月11日(金) 10:35～11:25
場 所：神戸女学院ソールチャペル
説 教：中野敬一(学院チャプレン)
- 卒業生によるコンサート
日 時：2019年1月18日(金) 10:35～11:25
場 所：神戸女学院 講堂
出 演：須山由梨(ピアノ・音楽学部卒業生)
問い合わせ：チャプレン室 TEL 0798-51-8502

高校生等参加イベント

- オープンキャンパス
日 時：12月16日(日)、2019年3月23日(土) 10:00～15:00
内 容：模擬講義、キャンパスツアー、各種相談コーナー 他
問い合わせ：入学センター TEL 0798-51-8543
- ラボ見学ツアー～理学館体験～
日 時：12月16日(日) / 2019年3月23日(土)
場 所：エミリー・ブラウン記念館(予定)
参加費：無料・申込み不要
(対象：高校生・予備校生等の女子、保護者、教員)
問い合わせ：人間科学部事務室
TEL 0798-51-8553 FAX 0798-51-8560
E-mail: jin-jim@mail.kobe-c.ac.jp
- 冬期講習会(音楽)
日 時：12月16日(日)
場 所：神戸女学院大学 音楽館
参加費：無料・申込み要
問い合わせ：音楽学部事務室 TEL 0798-51-8550
FAX 0798-51-8551 E-mail: music@mail.kobe-c.ac.jp

めぐみ会主催行事

2018めぐみ公開講座

- 2018キリスト教セミナー
「聖書とは？―翻訳から考える(全3回)」
第1回 2019年2月5日(火) 10:30～12:00
何を「聖書」と受け止めてきたか？
第2回 2019年2月19日(火) 10:30～12:00
聖書翻訳の歴史
第3回 2019年3月5日(火) 10:30～12:00
日本聖書協会の新翻訳
講 師：学校法人神戸女学院理事長・院長 飯 謙 氏
会 場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円(学生は無料) ※要予約(ホームページからも可)
問い合わせ・申込み：公益社団法人神戸女学院めぐみ会
TEL 0798-51-3545 URL: <https://megumikai.or.jp/>

「Vistas」アンケートのお願い

神戸女学院大学広報誌「Vistas」をご覧いただきありがとうございました。
P.17～18にアンケートハガキがございますので、皆様からのご意見・ご要望等をお寄せください。

—※行事について特に記述のないものは、基本的に申込み不要・無料です。—